

# フランス語およびロマンス諸語における 単純未来形の総合化・文法化について

渡 邊 淳 也

## 1. はじめに<sup>1</sup>

本稿は、フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化 (synthétisation), およびそれにとまなう文法化 (grammaticalisation) について論ずることをおもな目的とする。関連するところでは他の未来時制についてもふれることになる。総合化とは、もともとは統辞的關係にあった複数の語が、通時的变化によってひとつに融合することであり、単純未来形に関しては下記2.2節でその経緯を述べる。

以下、2節でロマンス諸語における単純未来形の成立について概観し、3節でフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語における単純未来形の総合化の進展を比較する。そして4節では、総合化にとまなう文法化や意味変化がどのようなものであったかを考察する。5節では事例研究として、フランス語の単純未来形のいわゆるモダールな用法について検討する。

## 2. ロマンス諸語における単純未来形の成立

2.1. 以下では、つぎのふたつの名称をフランス語のみならず他のロマンス諸語にも (対応物が存在するかぎり) 用いることとする。

- ・単純未来形 (futur simple) : j'aimerai, tu aimeras, il aimera...
- ・迂言的未来形 (futur périphrastique) : je vais aimer, tu vas aimer, il va aimer...

なお、ポルトガル語の迂言的未来形〈ir + 不定法〉はフランス語と同様の構成であるが、スペイン語の迂言的未来形は〈ir + a + 不定法〉と、移動の終着

<sup>1</sup> 本稿は、科学研究費補助金 (基盤研究(C)) 課題番号19520414「日英語ならびに西欧諸語における時制の比較研究」(研究代表者和田尚明) および科学研究費補助金 (基盤研究(C)) 課題番号20520348「フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究」(研究代表者渡邊淳也)の補助をうけている研究の成果の一部である。

点などを示す前置詞aがはいる。一方、イタリア語には上記に直接対応する\*〈andare+不定法〉で形成される迂言的未来形が存在しない。また、ルーマニア語には単純未来形が存在せず、迂言的未来形も上記に直接対応するものは存在しない。

2.2. ロマンズ諸語の単純未来形はいずれも、俗ラテン語に起源がもとめられる。連続したつづり字 (graphie soudée) での初出は7世紀であるが、体系的に出てきたのは842年『ストラスブールの宣誓』Serment de Strasbourgからである。『ストラスブールの宣誓』にはつぎのような形がみられる。

**saluarai** < salvare + habeo (sauver + ai)

**prindrai** < prendere + habeo (prendre + ai)

このような単純未来形が出現してきた理由は、ラテン語の単純未来形のうち3人称単数 amabit ならびに1人称複数 amabimusが、それぞれ単純過去形 amavit, amavimus とまぎらわしく、民衆に忌避されたからである。ロマンズ諸語では、義務をあらわす迂言形 (habere+不定法, debere+不定法)、願望をあらわす迂言形 (velle+不定法) などで未来形を代用した。そのうち、habere は後置され総合化し、単純未来形となった。

2.3. 現代ロマンズ諸語では、単純未来形はつぎのような形態になっている。

イタリア語 amare の単純未来形 : amerò, amerai, amerà, ameremo,  
amerete, ameranno

スペイン語 amar の単純未来形 : amaré, amarás, amará, amaremos,  
amaréis, amarán

ポルトガル語 amar の単純未来形 : amarei, amarás, amará, amaremos,  
amareis, amarão

フランス語 aimer の単純未来形 : (j')aimerai, (tu) aimeras, (il) aimera,  
(nous) aimerons, (vous) aimerez,  
(ils) aimeront

これらはいずれも、「不定法+habereの直説法現在形」の総合化に由来する(フランス語のみ主語代名詞が接辞なのでカッコにいれて示している)。

2.4. 一方、ロマンズ諸語のなかで、ルーマニア語の未来形はこれまでにみた4つの言語とまったく異なる。

3.2. しかし、特徴 A だけで単純未来形の総合化の度合いの差を断定するのは早計である。ポルトガル語では、単純未来形におかれた動詞が目的語接辞代名詞をとるときに、単純未来形が不定法由来部分と助動詞由来部分のふたつにわかれ、あいだに代名詞が割り込むという現象がある。例：Dar-me-as(« [tu] me donneras ») (Novakova 2001, p.50)。これは、ポルトガル語の単純未来形にお

いて綜合化が限定的であることを直接示す決定的な特徴である。これを特徴 B とよぶ。

3.3. 単純未来形はその名のとおりに「綜合的」(synthétique), 迂言的未来形は「分析的」(analytique) な形式であるといわれるが, 以上の形態論上の観察からもすでに, その区別を絶対的なものとして前提するべきではないことがわかる。その理由をまとめるとつぎのようになる。

(i) 通時的にみると, それぞれの形態は「綜合化」(ひいては「文法化」)の動的な過程をたどりつづけており, 単純未来形の「綜合性」, 迂言的未来形の「分析性」に固定的な地位をあたえることはできない。

(ii) 共時的にみても, 単純未来形の構成要素の形態や機能が析出する場合もあれば, 逆に迂言的未来形がその形態や機能において分析不可能なまでに癒着している場合もあり, 両者の「綜合的・分析的」という地位はかならずしも固定していない。とりわけ, フランス語と他のロマンス諸語において, 起源をおなじくする時制を対照してみると, それぞれの形式に「綜合性 synthéticité」の度合いの相違がみつめられる。

3.4. 単純未来形の綜合性の比較にもどり, 意味論的な特徴もみてゆこう。フランス語においては, 単純未来形の現在推量用法<sup>2</sup>が(下記の(2)の例でみるコルシカ方言や, ラングドック, プロヴァンスなど, 南部の諸方言をのぞいて)衰退している<sup>2</sup>。(1)は Proust からの実例であるが, 現代の標準的なフランス語ではこのような用法は稀である。(2)は Barceló et Bres によるとコルシカ人の話者による発話であるという。

(1) フランス語: Pour qui a-t-on sonné la cloche des morts ? Ah ! mon Dieu, ce sera pour M<sup>me</sup> Rousseau.

(Proust, *A la recherche du temps perdu*, I, p.84)

だれのために死者の鐘がなったのかしら? あっ, まあ, ルソー夫人のためでしょうね!

<sup>2</sup> 現代の標準的なフランス語では, 衰退した単純未来形の現在推量用法にかわって, devoir の認識的用法が用いられる。すなわち, 従来単純未来形の領域だったところへ devoir が進出してきたのである。この進出は, 渡邊 (2004, pp.266-269) で指摘した devoir の「拡大使用」(「誇張法的使用」)に対応している。

- (2) フランス語：Paul n'est pas là. Il **sera** malade.

(Barceló et Bres 2006, p.108)

ポールはきていない。病気のだろう。

フランス語で周辺的にみられる(2)のような例も、なんらかの事実の原因や事物の正体を推量する「見なしの用法 *putatif*」(Sthioul 1998, p.206)にかぎられ、しかも動詞はほぼ *avoir*, *être* にかぎられる。他のロマンス諸語でも状態性の動詞が好まれるという傾向（それはおどろくべきことではなく、認識的モダリティ全般にひろく該当する傾向にすぎない）はあるものの、あきらかに、フランス語ほど強い制約はない。

それに対して、(3)～(5)のように、スペイン語・イタリア語・ポルトガル語では現在推量用法の単純未来形がこんにちも盛んに使われている。これを特徴 C とする。

- (3) スペイン語：Ernesto **tendrá** ahora unos cincuenta años. (Squartini 2004, p.73) エルネストはいま50歳くらいだろう。  
(4) イタリア語：Adesso **saranno** le quattro. (ibidem, p.77)  
いまごろは4時だろう。  
(5) ポルトガル語：Que horas **sarão** ? (ibidem, p.80) いま何時だろう？

3.5. Squartini (2004, p.83) の指摘によると、ポルトガル語においては、条件法(6)のほか、単純未来形にも(7)のような報告用法がある<sup>3</sup>。それに対して、フランス語・スペイン語・イタリア語では、(8)～(10)のように報告用法を発達させているのは条件法 (*amare habebam* に由来する形) のみであり、単純未来形に報告用法はない。これを特徴 D とする。

- (6) ポルトガル語：Ao mesmo tempo desmentiu informações da imprensa segundo as quais os EUA **estariam** a treinar militarmente grupos opositores a Saddam.

---

<sup>3</sup> (6)の条件法は、主節の動詞 *desmentiu* (単純過去) に要請された時制の呼応によるが<sup>3</sup>、時制の呼応を統率する主節がない(7)のような場合には単純未来形をもちいる。フランス語・スペイン語・イタリア語では主節の有無にかかわらず条件法を用いる。渡邊 (2008, p.41) 参照。

(*Diário de Notícias*, 1/2/1999, cité dans Squartini, ad loc.)

同時に彼はアメリカ合衆国がサダム・フセインの反対派を軍事的に訓練している（条件法）という報道情報を否定した。

- (7) ポルトガル語：Ensino público do português **estará** ameaçado no Canadá.

(*Diário de Notícias*, 25/2/1999, cité dans Squartini, ad loc.)

ポルトガル語の公的教育はカナダにおいて危機に瀕しているという（単純未来形）。

- (8) フランス語：Selon le quotidien *Liberté* de mardi, qui fait l'état de « sources bien informées », il [=le bilan du massacre en Algérie] **serait** de 428 morts et de 140 blessés.

(*Le Monde*, 14/1/1998, cité dans Watanabe 2001, p.216)

「たしかな情報筋」を引きあいに出している火曜の日刊紙『リベルテ』によると、それ [=アルジェリアにおける虐殺事件の被害者数] は死者428人、負傷者140人にのぼるらしい（条件法）。

- (9) スペイン語：Según fuentes políticas consultadas por este periódico, Milosević **habría aceptado** que la fuerza de interposición en Kosovo esté compuesta por un 30% de la OTAN.

(*El País*, 7/5/1999, cité dans Squartini 2004, p.85)

本紙が照会した政治的情報筋によると、ミロシェヴィチはコソヴォに介入する軍のうち30%がNATOによって構成されることを受け入れたという（条件法複合形）。

- (10) イタリア語：Osama Bin Laden **sarebbe morto** di tifo un mese fa.

(*Corriere della Sera*, 24/9/2006)

オサマ・ビン・ラデンは1か月前にチフスで死去したという（条件法複合形）。

3.6. 特徴A～Dを、総合化の進展という観点からとらえかえすと、つぎのようなことがいえる。

まず特徴A（助動詞の現在形との形態的類似）は、2つ違うフランス語・イタリア語・ポルトガル語が、1つ違うスペイン語以上に総合化が進んでいるとみなすことができる[フランス語・イタリア語・ポルトガル語>スペイン語]。

特徴B（語尾分離の可能性）は、ポルトガル語のみ可能なので、総合性が低い[フランス語・イタリア語・スペイン語>ポルトガル語]。

特徴C（現在推量用法の存在）、特徴D（伝聞用法の存在）は、いずれも未

来時指示の時間的な用法と直接には重ならない、すぐれてモダールな用法の幅の広さが問題になっているといえる。そうしたモダールな用法は、後論を先どりしていうと、「判断する今」に焦点をあてる現在時指示であってこそ発生するものであり、その現在性は、現在形におかれた助動詞によってもたらされるものであると考えられる。これらのモダールな用法が活発に機能するためには、総合化が進展すればするほど溶け込んだ要素として埋没しかねない助動詞部分の機能が生きていなければならない。したがってモダールな用法の幅の広さは、総合性の低さと関連づけられる。特徴 C（現在推量用法の存在）ではフランス語のみ総合性が高く[フランス語>イタリア語・スペイン語・ポルトガル語]、特徴 D（伝聞用法の存在）は、ポルトガル語のみ総合性が低い[フランス語・イタリア語・スペイン語>ポルトガル語]。

特徴 B と C, D とは密接な関係にある。ポルトガル語で助動詞部分が分離可能であること (B) は、助動詞がおかれた時制である現在形によってしめされる現在時が卓立可能であるということであり、モダールな用法の発達 (C, D) の基盤になっていると考えられる。

以上をまとめるとつぎの表 1 のようになる。各特徴ごとに、相対的に総合性の高いものを+, 低いものを- とする。もちろん各特徴には質的な差異があり、おのずから重要度にも差はあるが、総合性の度合いを比較するための目安としてはこの表は有用であると思われる。とりわけ、フランス語が単純未来形の総合化を相対的に高度に進展させていることは一目瞭然であり、今後の議論のためにもおさえておくべき点である。

表 1：4 つの言語での単純未来形の総合性の比較

(+, - は各特徴を有するか否かではなく、総合化の度合いの高低を示す)

比較基準	フランス語	イタリア語	スペイン語	ポルトガル語
特徴 A	+	+	-	+
特徴 B	+	+	+	-
特徴 C	+	-	-	-
特徴 D	+	+	+	-

## 4. 総合化と文法化・意味変化

4.1. 総合化の視点にたつ議論を大胆におし進めたのが Fleischman (1982) である。Fleischman は、歴史的には、古典ラテン語の単純未来形も、ロマンス諸語の単純未来形も、迂言的未来形も、それぞれの形態を基準にしてみると、もとは分析的（迂言的）であった形態から出発して総合化にむかう規則性をたどっており、またそれぞれの時代を基準としてみると、時代ごとに新たな迂言形が採用されるという点では分析的な形を志向する規則性があるとして、以下の表2にみるような「分析的・総合的周期」(Analytic and synthetic cycles)を提唱している。

表2：Analytic and synthetic cycles (Fleischman 1982, p.104)

	STRUCTURE	FORM	STAGE OF THE LANGUAGE
Diachronic phase I	Analytic	*ama-bhû	Reconstructed Indo-European
	↓	↓	
	Synthetic	amabo	Classical Latin
Synchronic phase I amabo / cantare habeo			later Latin
Diachronic phase II	Analytic	cantare habeo	later spoken Latin → Common Romance
	↓	↓	
	Synthetic	cantaré	Romance (Spanish)
Synchronic phase II cantaré / voy a dormir			Modern Romance
Diachronic phase III	Analytic	voy a dormir	Contemporary Romance (Spanish)
	↓	↓	
	Synthetic	[yo vadormir]	Contemporary American Spanish dialects

まず、当初はインド・ヨーロッパ祖語の \*bhû (「ある」; je fus, futur などの語源) を動詞のあとにつける迂言形であった未来形が、のちに総合化し、古典ラテン語の単純未来形になった。

ロマンス諸語の単純未来形の出現についてはすでに2節でのべたとおりである。



ロマンス諸語の迂言的未来形は13世紀には観察されているが、「切迫」(imminence)の意味から「未来性」(futurité)の意味に移行し、真に単純未来形と競合するにいたるまでには時間がかかり、17世紀をまたなければならぬ(Novakova 2001, p.50)。

あらたな分析的形態が採用され、そして最後には従前の総合的形態が忘却されるにいたる理由としては、共時的に比較したとき、機能がはっきりと示される形態が好まれるという要因があげられている(Anderson 1979, p.33 et Fleischman 1982, p.106)。

4.2. しかし、Fleischman による「分析的・総合的周期」には、つぎにのべるような問題点がある。

まず、Fleischman 自身がみとめているように(pp.115-117)、助動詞前置型と後置型では総合化のしやすさに大きな違いがある。すなわち、前置型は助動詞で示されるはずの人称語尾が接合部に吸収されてしまうので総合化しづらく、後置型は語尾を保存できるので総合化しやすいのである。このため、古典ラテン語の単純未来形・現代ロマンス諸語の単純未来形・現代ロマンス諸語の迂言的未来形の3つに同質の変化を想定することはできない。

また、古典ラテン語の単純未来形の消滅には、amabit/amavit がまぎらわしいという明確な忌避理由が関与しているが、現代ロマンス諸語の単純未来形を同様に消滅に向かわせるような理由はあるか、そして実際に消滅に向かっていくといえるか、疑問が残る<sup>4</sup>。

4.3. つぎに、総合化にともなう意味変化にはどのような傾向があるのであろうか。それに関する Fleischman (1982) の所説をみておこう。まず、大わくとしての意味変化の方向性として、

---

<sup>4</sup> Barceló (2007) も本稿と同様、Fleischman の周期に疑義を呈しているが、結論は本稿とは逆に、単純未来形の通時的変遷はモダリティ化の動きであったとしている。その最大の論拠としてあげられているのは、古フランス語に推量用法が存在せず、それよりおそい時期におこなわれるようになったことである(ibidem, p.51)。しかし、推量用法に言及するなら、現代の標準的なフランス語ではそれが衰退したことを無視してはいけない。そのことには Barceló (ad loc.) は言及しているものの、通時的変化の体系に取りこんだ形での説明はしていない。さらには、「Je vous dirai...」のような「発語内的未来 futur illocutionnaire」を未来にむけての時間的なずれ(décalage, ibidem, p.53)によって説明するにいたっては、モダリティ化の自説に反して時制的説明を展開していることになり、一貫しない論である。

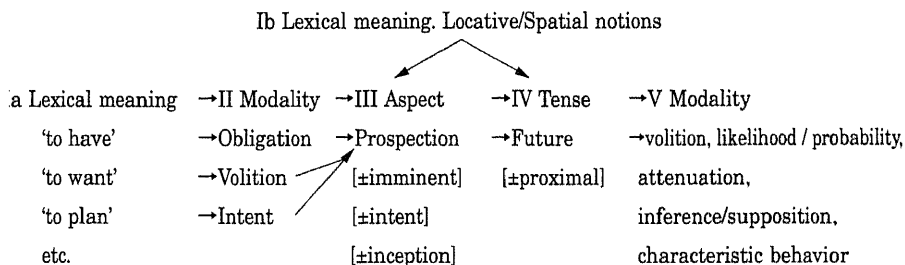
Futures [...] tend to evolve from modals (or aspectuals) and tend likewise to be put to modal uses. These shifts may be envisaged as a continuous three-stage process :

Aspect / Modality → Future Tense → Modality

(Fleischman 1982, p.108)

と言っている。そして、より詳細には、つぎの表に示されるような意味変化をたどる傾向があるという。

表 3 : Diachronic semantics of futurity (Fleischman 1982, p.129)



これらの図式のなかで、モダリティが2度あらわれる（表3ではIIとV）ことが問題になりうる。表3でVをのぞけば、IからIVまでは、「時制化」のプロセスであるといえる。Aoki et Tamba (2000, p.31) は、過去／現在／未来という「時制の3分割」(division tripartite des temps)の強固な自明化をフランス語の特徴としてあげているが、その特徴は、本稿で確認した、フランス語の単純未来の総合化が高度に進展しているということと関連づけることが可能であると思われる。それでは、FleischmanのVの段階にあるモダリティ化の現象はどのように説明すればよいのであろうか。Vの段階のモダリティの下位分類をみると、時制的な未来とわかちがたく結びついているモダリティであり、時間性からの派生であると考えられる。IIの段階のモダリティが助動詞が本来もっていた語彙の意味を分析的に反映している（したがって、「モダリティ」とよぶことが不当とまでは言えないにしても、かなり事態描写的なものである）のとは事情がちがうものであり、Vの段階のモダリティ化を文法化・総合化における「逆行」のように考える必要はないと思われる。

4.4. すでに明らかなように、未来諸時制があらわしうるモダリティをどのよう  
にみるかが最大の焦点である。

まずことわっておかなければならないことは、未来に関しては、もともと「純  
然たる時間指示」が成りたちづらい、ということである。未来の事態について  
述べることは、予言 (prédiction) という言語行為や、予測 (prévision) とい  
う判断と不可分であり、本来的に、なにほどかはモダールである。たとえば、  
往々にして「純然たる時間指示の最たる例」とされるつぎのような例を考えて  
みよう。

(11) フランス語 : Les Jeux Olympiques **commenceront** le 20 juin.

(Confais 1990, p.287)

オリンピック大会は6月20日にはじまります。

(12) フランス語 : Les Jeux Olympiques **commencent / vont commencer**  
le 20 juin. (idem)

オリンピック大会は6月20日にはじまります。

(13) フランス語 : Le prochain train vous **fera** arriver à Paris à 6 heures  
13. (青木 1998, p.117)

つぎの列車は6時13分にパリに到着します。

(11)と(12)を比較して、Confais (1990, p.287) は、単純未来形をもちいた  
(11)はラジオなどではじめて予定を告げるときに適し、(12)のような現在形や  
迂言的未来形は適していないと指摘している。そして、こうした場合もふくめ  
て、単純未来形は、話者の関与や行為への方向づけを行なう形式であるという  
論を展開している<sup>5</sup>。

また、(13)においても、青木 (1998, p.117) が指摘するように、単純未来  
形を使用した場合、発話者が発話時点において時刻表などのデータを参照しつ  
つ対話者に告知するという、現在形にはない特徴がみられるのであり、「純然

<sup>5</sup> Dans cette optique, le FUT n'apparaît pas tant comme le véhicule d'une conviction par rapport à un contenu non vérifiable que comme le signal d'un engagement du locuteur par rapport à son dire, lequel, de ce fait, est plus orienté vers l'agir. C'est moins la vérité du contenu qui importe que le besoin de le dire.

(Confais 1990, p.286)

たる時間指示」であると見なすことはミスリーディングであると思われる。

4.5. 未来諸時制におかれる動詞の事行が位置づけられるのは未来時である場合でも、未来諸時制があらわすとされるモダリティは発話時点(発話者の現在)に立脚してこそ構築される。ここに未来諸時制の二重性がある。

単純未来形 *j'aimerai* の場合、不定法由来部分 *aimer-* は、不定法が動詞の語彙を代表するのと同様に、表象のレベルで動詞事行を標示している。もちろん、現在形 *j'aime* にあらわれている単なる語幹 *aim-* でも、動詞事行は標示されてはいるが、不定法語尾に由来する *-r* がついていることにより、いっそう明示的に表象としての動詞事行が喚起されることになる(条件法のなりたちを考察する際、同様に *-r* を表象の標示として定式化した渡邊 2004, p.210 をあわせて参照されたい)。*aimer-* のあとにくる助動詞由来部分 *-ai* は、*aimer-* によって示された表象を発話時点からの定位 (*repérage*) の対象とし、現働化 (*actualisation*) する。その現働化の判断は、あくまでも発話者が発話時点においてくださしているものであり、*-ai* が現在形の形態素に由来することの意味はそこにある。迂言的未来形 *je vais aimer* においても、準助動詞 *vais* が *aller* の現在形であることの意味あいと同様である。不定法相当部分が命題 (Wada 2001, p.225 のいう *Proposition Domain*) の標示をにない、(準)助動詞相当部分がモダリティ (おなじく *Modality Domain*) の標示をにう。

3.4節でも少しふれるところがあったように、モダリティは発話者の判断であるから、発話者の現在である発話時点を基盤にしてこそ形成されるものである。前節4.4でみた(11)~(13)のような例に即していえば、述べられている未来における事態の実現を、発話者はあくまでも発話時点において対話者に告知し、その内容への関与や、行為への方向づけを行なっているのである。さらに、(11)~(13)のような例に限定せずに単純未来形全般についていうなら、Maingueneau (1999) のつぎのような説明が参考になるとと思われる。

Enoncer au futur, ce n'est pas situer un événement dans l'avenir, c'est désirer, ordonner, craindre, etc. Seule une vision réductrice du langage qui en fait un simple véhicule d'information permet de rejeter dans les marges ce qui est en réalité l'essence même du futur : la tension modale.  
(ibidem, p.101)

(未来形で発話することとは、未来にできごとを位置づけるのではなく、

欲したり、命令したり、危惧したりすることである。言語活動を単なる情報伝達とみなす単純化的な見かただけが、モダールな志向という、実は未来形の本質であるものを（不当に）周縁へ追いやってしまうのである）

じつは Maingueneau は単純未来形のみならず迂言的未来形についても、いま引用したモダリティ原義説を貫徹しようとするラディカルな立場である。その根柢には、発話時点における発話者の判断こそが、未来時の事態の表象（命題）を成りたたせているという考えかたがあるように思われる。それ自体はもちろん正当な考えであるが、本節冒頭でのべた未来諸時制の二重性のうち一方の側面のみに着目することであると思われる。命題とモダリティとのうち、どちらの次元が卓立されるかは、単純未来形と迂言的未来形によってもこととなり、おなじ単純未来形でも、言語ごとにそれがどの程度総合化されているかによってもこととなる。純然たる時間指示は存在せず、つねになにほどかはモダリティの混淆がみられることを前提的に認めておいたうえでいうなら、単純未来形の総合化は、どちらかというところ、未来時に位置づけられる命題の次元を卓立する方向への動きであるといえる。

4.6. 以上を要するに、ロマンス諸語の単純未来形にかぎっていえば、総合化の進展は、基本的には「時制化」の動きに対応している。上記で比較したなかで総合化がもっとも高度に進展したフランス語においてモダールな用法がもっとも衰退しており、もっとも総合化が進んでいないポルトガル語においてモダールな用法がもっとも豊かであるということを説明するには、総合化を脱モダール化、つまりは時制化と結びつけることが合理的である。そしてその時制化とともに出てくるモダリティは、いずれもなんらかの形で未来時と関連づけることができるものである。次の節では、事例研究として、フランス語の単純未来形のいわゆるモダールな用法について考察することにしよう。

## 5. 事例研究：フランス語における単純未来形のモダールな用法について

5.1. もとより、単純未来形のいずれの用法にも、時間性とモダリティが多かれ少なかれ同居しているという「程度問題」を整理しながら議論するために、便宜的に Touratier (1996, p.177-181) の用法分類にならって、[1] 時間的

用法 (emplois temporels), [2] 固有に時間的ならざる用法 (emplois qui ne semblent pas proprement temporels), [3] 非時間的用法 (emplois non-temporels) を区別することにしよう。それぞれの分類には、つぎに引用するような例が対応する。

[1] 時間的用法 (emplois temporels)

・明確な時間指示とともに：

- (14) Dans une minute je **saurai** si je suis encore un peintre.

(Sartre, *La mort dans l'âme*, p.29, cité dans Touratier 1996, p.177)

1 分後にはわたしはなお画家でいられるか知るだろう。

- (15) Mais il désire être sérieux, ce jeune frère qui **succombera** dans vingt minutes.

(Saint-Expéry, *Pilote de guerre*, p.207, cité dans Touratier, ad loc.)

しかしかれは真剣であろうとした、20分後にはたおれるであろうこの弟は。

・総称などで、漠たる未来時をさして：

- (16) Là où n'existe pas le sentiment de la patrie, aucun langage ne le **transportera**.

(Saint-Expéry, *Pilote de guerre*, p.230, cité dans Touratier, ad loc.)

祖国への感情がないところでは、いかなることばもそれを伝えないだろう。

- (17) Supprimez la richesse, vous **supprimerez** l'inconduite.

(R. de Gourmont, *M. Croquant, Pensée de M. Croquant, sur la vie*, p.15, cité dans Touratier, ad loc.)

富をとりのぞきなさい、そうすれば不品行をとりのぞくことになるだろう。

・歴史的未來 (futur historique)：過去の、物語の一段階からみた未來をさす用法。

- (18) Le général Ott eut trois mille tués, et laissa cinq mille prisonniers entre les mains des Français. De cette bataille **sortira**, pour le général Lannes, le titre de duc de Montebello.

(Bignon, cité dans Touratier 1996, p.178)

オット將軍は3000人の兵を戦死させ、5000人の捕虜をフランス人の手中にあたえた。この戦闘から、ランヌ將軍に、モンテベッロ公爵の称号が出ることになる。

[2] 固有に時間的ならざる用法 (emplois qui ne semblent pas proprement temporels)

・意志的未来 (futur de volonté) : Touratier は 2 人称の例のみをあげているので、通常いわれる「意思的未来」とはことなる。

(19) Allons, en voilà assez. Vous **quitterez** cette femme. Tout à l'heure je vous en priais, maintenant je vous l'ordonne.

(A. Dumas fils, cité dans Touratier, ad loc.)

さあ、もうたくさんだ。あなたはこの女性からはなれなさい。さきほどはそのことをたのんでいたが、こんどは命令する。

(20) Solander, vous **apporterez** un second lit de camp. Et débarrassez-nous de ce chien empaillé.

(Giraudoux, *Supplément au voyages de Cook*, p.176,  
cité dans Touratier, ad loc.)

ソランダー、2 つめの野営用ベッドをもってきなさい。そして、こののろまな犬を追いはらいなさい。

意志的未来は、モーセの十戒(21)など、戒律をあらわすこともある：

(21) Un seul Dieu tu **adoreras** / Et **aimera** parfaitement. / Homicide point ne **seras** / De fait ni volontairement (Touratier 1996, p.179)

なんじ、唯一の神を崇拝し、／完全に愛せよ。／なんじ殺人するなかれ、／なりゆきによっても意図によっても。

また、勧誘の意味にもなる：

(22) Vous **prendrez** bien une tasse de café avec moi, pour vous remonter un peu. (Chevallier, *Clochemerle*, p.186, cité dans Touratier, ad loc.)

わたしといっしょにコーヒーでもを 1 杯のんで、すこし元気を回復してください。

・格言的未来 (futur gnomique) : 経験から生じた忠告であるが、将来のためにいわれている。

(23) A l'égard des voleurs on ne **sera** jamais assez prudent. (Touratier, ad loc.)

泥棒に対しては、いくら用心しても十分ではない。

(24) Qui vivra **verra**. (idem)

生きるものは見るだろう。(生きていればいろいろなことがある)

## [3] 非時間的用法 (emplois non-temporels)

・推量的未来 (futur de conjecture) : 本稿でいう現在推量用法。

- (25) Pour qui a-t-on sonné la cloche des morts ? Ah ! mon Dieu, ce **sera** pour M<sup>me</sup> Rousseau. (Proust, *A la recherche du temps perdu*, I, p.84, cité dans Touratier, ad loc.)

だれのために死者の鐘がなったのかしら？ あっ、まあ、ルソー夫人のためでしょうね！

- (26) Croyez-vous pas que je viens de voir comme je vous vois Mme Goupil avec une fillette que je ne connais point. Allez donc chercher deux sous de sel chez Camus. C'est bien rare si Théodore ne peut pas vous dire qui c'est.

— Mais ce **sera** la fille à M. Pupin, disait Françoise, qui préférait s'en tenir à une explication immédiate, ayant été déjà deux fois depuis le matin chez Camus.

(Proust, *A la recherche du temps perdu*, I, p.55, cité dans Touratier, ad loc.)

ただし Touratier による省略箇所をもとに戻した)

「信じられますか、わたしはいまあなたを見るのと同じようにはっきりと、グーピルさんがわたしの知らない娘といっしょにあるのを見たのですよ。だからちょっと、カミュさんの店に行って、塩を2スー買ってきてくれないかしら。テオドルが彼女を知らないはずはないから」

「いや、それはピュバンさんの娘でしょう」とフランソワーズは言った。フランソワーズは朝からもう2度もカミュさんの店にお使いに行っていて、てっとり早い説明にとどめておくほうを好んだのだ。

・語調緩和の未来 (futur d'atténuation) :

- (27) Je ne vous **cacherai** pas que je ne suis guère satisfait.

(Imbs 1960, p.52, cité dans Touratier, p.180)

わたしはほとんど満足していないことをかくしますまい。

- (28) Je vous **demanderais** de vous taire. (Touratier, ad loc.)

あなたにはだまっていたきたいと申しあげましょう。

・抗議の未来 (futur de protestation) : 発話者が賛同しない内容を修辭的に提示するもの。

- (29) Vous vous emparez de son bien, de son coeur, et cette femme ne **criera** pas ! (Marivaux, , cité dans Touratier 1996, p.181)



あなたは、かの女の財産をとりあげ、心を取りあげて、このご婦人が泣かないとでもいうのだろうか！

・蓋然性の未来 (futur d'éventualité) :

(30) C'était, **penserez-vous** peut-être, participer à l'erreur que je dénonçais au début.

(*Europe*, décembre 1949, p.146, cité dans Touratier, ad loc.)

それはわたしがはじめには糾弾していた誤りに自分もおちいることだった、とあなたはお考えになるかもしれません。

5.2. Touratier の意図は、単純未来の諸用法が、もっぱら時間性を標示する用法と、もっぱらモダリティを標示する用法に二分されるのではなく、それらのあいだに混淆的用法が存在することを示すことであったかもしれないが、はからずも、いったん混淆をみとめれば、実は純然たる時間的用法も、純然たるモデルな用法も存在しないことがわかってくると思われる。Touratier が混淆をみとめている [2] の用法はいうにおよばず、未来時を指示せず、もっぱらモダリティを示すとみなしている [3] の用法も、事行を直接未来に位置づけていないだけであって、以下に順次述べるように、いずれもなんらかの未来時との関連づけが可能なるものである。

5.3. まず、現在推量用法については、Damourette et Pichon (1911-1936, § 1821) による、「[...] Il y aura un moment où, sorti de doute, on pourra dire « C'est la fille de M. Pupin »」にさかのぼる説明、すなわち、未来時において真偽が判明するであろうことがらを、いまのところ推測しているという説明が可能である。たとえば、(26)の例の末尾の、「Françoise, qui préférerait s'en tenir à une explication immédiate」というくだりを見よう。ここではまさしく、のちに事実確認を経て知られるであろう真実と対置されるものとして、「explication immédiate」があらわれているのである。

語調緩和用法については、Touratier (1996, p.180) は、単純未来形が投影 (projection) の表現であることから説明している。「j'envisage, je me propose de vous demander de vous taire」ということである。また、時制派のはずの Barceló et Bres (2006, p.109) も「si vous voulez」の挿入により、仮定構文と関連づけ、モデルな説明をこころみている。しかし、本稿の立場からすると、これも未来時に関連づけることはできる。語調緩和用法においては、発言

動詞や遂行動詞が単純未来形におかれている。そのことによって、それらの動詞が発動する言語行為の遂行が未来方向へと擬制的に遅滞させられ、対話者の了承を待つことのできる時間的間隙が生じることになる。語調緩和の効果はその時間的間隙によって得られるのである。

抗議用法において単純未来形が果たしている機能は、日本語の「～とでも言うのだろうか」という表現に類似している。すなわち、相手がまだ言っていないがこれから言いそうなこと、言いかねないことを先どりして提示しているのであり、抽象的ながら未来性が看取できる。この点は、Barceló et Bres (2006, p.108) のいう「対話性」(dialogisme) をもちいた説明と接続可能であると思われる<sup>6</sup>。

蓋然性用法は現在推量用法に近く、いまだ真偽が確認されていない内容であるがゆえに、その確認を先どりするかたちで単純未来形が用いられると考えられる。

5.4. 簡略ながら以上でみてきたように、フランス語の単純未来形のいわゆるモデルな用法においては、いずれの場合も、たとえ単純未来形におかれた動詞の事行が直接未来に位置づけられないにしても、それにまつわるなんらかの事態が未来に位置づけられているといえる。このこともまた、単純未来形の総合化＝時制化が、フランス語において高度に進展しているという事実と相即していると思われる。

## 6. おわりに

以上、本稿では、フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について論じてきた。単純未来形をもつ4つのロマンス系言語のあいだでの諸特徴の比較から、基本的に、単純未来形の総合化は、時制化の進展に対応しているとの結論にいたった。一方、単純未来形が標示しうるモデルテ

<sup>6</sup> Barceló et Bres (2006) は、単純未来形のみならず半過去形、前未来形のモデルな用法を説明する際にも、ほとんどの場合を、この「対話性」の介在によって説明しようとしている。すなわち、一般的に、発話者と対話者は交互に発言するしかないで、対話者の発言は必然的に発話者の発言とは時間がずれる。その時間的前後関係が時制に反映していると考えるのである。しかし、この説明がどの程度うまく行くかは、適用対象となる事例によってことなる。くわしくは渡邊 (à paraître) を参照。

ィは、一般的にいうと未来時制全般の基底に想定できる発話者の判断の現在性に立脚しているものではあるが、フランス語のように単純未来形の総合化が高度に進展しているとみられる言語においては、モダールな用法がいずれもなんらかの未来時指示と結びついていることから、総合化が時制化につながっているとする説が再確認されることとなった。

なお、本稿は未来諸時制の包括的な研究プログラムの一環として位置づけられるものであり、今後、さらに単純未来形の分析を深化させるとともに、迂言的未来形の研究をも推進してゆくことにより、未来諸時制の機能がいっそう明らかになるものと思われる。

#### 参考文献

- Álvarez Castro, C. (2007) : « Interprétation du futur du l'indicatif et représentation d'événements futurs », *Cahiers Chronos*, 19, pp.7-24.
- Anderson, E. W. (1979) : « The Development of the Romance Future Tense », *Papers in Romance*, 1, pp.21-35.
- 青木三郎 (1998) : 「現代フランス語の単純未来形の「多変性」について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 34, pp.115-133.
- Aoki, S. et I. Tamba (2000) : « Avenir, anticipation et catégorie linguistique du futur », *SCOLIA (Sciences Cognitives, Linguistique et Intelligence Artificielle)*, 12, pp.25-37.
- Barceló, G. J. (2004 a) : « Guillaume et le futur roman : à propos du futur périphrastique », *Modèles linguistiques*, 25, 1-2, pp.169-178.
- Barceló, G. J. (2004 b) : « L'occitan e lo catalan : doas lengas bessonas ? Un futur compromettent », *Linguistica occitana*, 1, pp.1-12.
- Barceló, G. J. (2004 c) : « Lo(s) futur(s) occitan(s) e la modalitat : elements d'estudi semantic comparatiu », *Linguistica occitana*, 2, pp.1-10.
- Barceló, G. J. (2006) : « Le futur des langues romanes et la modalité », *Cahiers de praxématique*, 47, pp. 177-190.
- Barceló, G. J. (2007) : « Le(s) futur(s) dans les langues romanes », *Cahiers Chronos*, 16, pp.47-62.
- Barceló, G. J. et J. Bres (2006) : *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.
- Bourova, V. et L. Tasmowski (2007) : « La préhistoire des futurs romans », *Cahiers Chronos*, 19, pp.25-41.
- Bres, J. et G. J. Barceló (2007) : « La grammaticalisation de la forme itive comme prospectif dans les langues romanes », M. M. J. Fernandez-Vest (Dir.) : *Combat pour les langues du monde : Hommage à Cl. Hagège*, L'Harmattan, pp.91-41.

- Celle, A. (1997) : *Etude contrastive du futur en français et ses réalisations en anglais*, Ophrys.
- Celle, A. (2006) : *Temps et modalité*, Lang.
- Confais, J.-P. (1990) : *Temps, mode, aspect*, Presses Universitaires du Mirail.
- Culioli, A. (1990) : *Pour une linguistique de l'énonciation*, 1, Ophrys.
- Curat, H. (1991) : *Morphologie verbale et référence temporelle en français moderne*, Droz.
- Damourette, J. et E. Pichon (1911-36) : *Des mots à la pensée*, 9 vols, d'Artrey.
- Dahl, Ö (Ed.) (2000) : *Tense and aspect in languages of Europe*, Mouton de Gruyter.
- Dendale, P. (2001) : « Le futur conjectural versus devoir épistémique », *Le français moderne*, 69, 1, pp.1-20.
- Desclés, J.-P. (1995) : « Les référentiels temporels pour le temps linguistique », *Modèles linguistiques*, 32, pp.9-36.
- Enç, M. (1996) : « Tense and Modality », Sh. Lappin (Ed.) : *The handbook of contemporary semantic theory*, Blackwell, pp.345-358.
- Fleischman, S. (1982) : *The future in thought and language*, Cambridge University Press.
- Forest, R. (1993) : « « Aller » et l'empathie », *Bulletin de la Société de linguistique de Paris*, 88, pp.1-24.
- Franchel, J.-J. (1984) : « « Futur « simple » et futur « proche » », *Le français dans le monde*, 182, pp.65-70.
- Gosselin, L. (1996) : *Sémantique de la temporalité en français*, Duculot.
- Guillaume, G. (1970) : *Temps et verbe*, Honoré Champion.
- Helland, H. P. (1995) : « Futur simple et futur périphrastique », *Revue Romane*, 30, 1, pp.3-26.
- Hristea, Th. (Ed.) (1984) : *Sinteze de limba română*, Albatros.
- Huddleston, R. (1995) : « A case against a future tense in English », *Studies in languages*, 19, 2, pp.399-446.
- Imbs, P. (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
- Jeanjean, C. (1988) : « Futur simple et futur périphrastique en français parlé », Cl. Blanche-Benveniste et alii (Eds.) : *Grammaire et histoire de la grammaire : hommage à la mémoire de Jean Stefanini*, Publication de l'Université de Provence, pp.235-257.
- 川口順二 (2006) : 「モダリティ動詞 aller」『藝文研究』(慶應義塾大学) 91, 3, pp. 1-19.
- Kirsten, G. et alii (1976) : *Grammatica italiana per tutti*, Klett.
- Laca, B. (2004) : « Les catégories aspectuelles à expression périphrastique : une interprétation des apparentes « lacunes » du français », *Langue française*, 141, pp.85-98.
- Leeman-Bouix, D. (1994, 2002<sup>3</sup>) : *Grammaire du verbe français*, Nathan.
- Le Goffic, P. et F. Lab (2001) : « Le present « pro futuro » », *Cahiers Chronos*, 7,

pp.77-98.

- Maingueneau, D. (1999) : *L'énonciation en linguistique française*, Hachette.
- Martin, R. (1983) : *Pour une logique du sens*, Presses Universitaires de France.
- 南館英孝(1998) : 「Aller+inf.と単純未来」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える』三修社, p.22-33。
- Naffati, H. et A. Queffelec (2004) : *Le français en Tunisie*, Réseau des Observatoires du Français Contemporain en Afrique.
- 練尾 毅(1998) : 「近接未来形について」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える』三修社, p.34-44。
- Nef, F. (1986) : *Sémantique de la référence temporelle en français moderne*, Peter Lang.
- Novakova, I. (2001) : *Sémantique du futur*, L'Harmattan.
- Perret, M. (1994) : *L'énonciation en grammaire du texte*, Nathan.
- Reichenbach, H. (1947) : *Elements of symbolic logic*, Macmillan.
- Rocci, A. (2000) : « L'interprétation épistémique du futur en italien et en français », *Cahiers de linguistique française*, 22, pp.241-274.
- Rotgé, W. (1995) : « Temps et modalité », *Modèles linguistiques*, 31, pp.111-129.
- 佐藤正明(1985) : 「Aller+inf.と未来形の機能的差異」『フランス語学研究』19, pp. 70-80。
- 佐藤正明(1986) : 「未来形と modalité」『東北大学教養部紀要』46, pp.288-308。
- 佐藤正明(1994) : 「発話者の個人的評価を表わす前未来」『フランス語学研究』28, pp. 1-13。
- 澤田治美(2006) : 『モダリティ』開拓社。(とくに第18章「未来性からモダリティへ」)
- Schogt, H. G. (1968) : *Le système verbal du français contemporain*, Mouton.
- Schrott, A. (1997) : *Futurität im Französischen der Gegenwart*, Gunter Narr.
- Söll, L. (1983) : « De la concurrence du futur simple et le futur proche en français moderne », Hausmann, F. J. (Ed.) : *Etudes de grammaire française descriptive*, Julius Groos, pp.16-24.
- Squartini, M. (2004) : « Il Futuro e il Condizionale nelle lingue romanze », *Revue Romane*, 39, 1, pp.68-96.
- Stage, L. (2002) : « Les modalités épistémique et déontique dans les énoncés au futur (simple et composé) », *Revue Romane*, 37, 1, pp.44-66.
- Stage, L. (2003) : « Les valeurs modales du futur et du présent », M. Birkelund et elii (Eds.) : *Aspects de la modalité*, Niemeyer, pp.203-216.
- Sthioul, B. (1998) : « Temps verbaux et point de vue », J. Moeschler (Dir.) : *Les temps de l'événement*, Kimé, pp.197-220.
- Sten, H. (1952) : *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Munksgaard.
- Sundell, L.-G. (1991) : *Le temps futur en français moderne*, Acta Universitatis Upsaliensis.
- Sundell, L.-G. (2003) : « Le futur modal revisité », M. Birkelund et elii (Eds.) : *Aspects de la modalité*, Niemeyer, pp.217-227.

- Touratier, Chr. (1996) : *Le système verbal français*, Colin.
- Vet, C. (1981) : « La notion de « monde possible » et le système temporel et aspectuel du français », *Langages*, 64, pp.109-124.
- Vet, C. (2003) : « Attitude, vérité et grammaticalisation : le cas du futur simple », M. Birkelund et elii (Eds.) *Aspects de la modalité*, Niemeyer, pp.229-239.
- Vetters, C. (2001) : « Le conditionnel : ultérieur du non-actuel », P. Dendale et L. Tasmowski (Eds.) : *Le conditionnel en français*, Université de Metz, pp.169-207.
- Wada, N. (2001) : *Interpreting English Tenses : A Compositional Approach*, Kaitakusha.
- Watanabe, J. (2001) : « Le conditionnel du « discours d'autrui » », *Etudes de langue et de littérature françaises*, 78, pp. 216-230.
- 渡邊淳也 (2004) : 『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社。
- 渡邊淳也 (2007a) : 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法」『フランス語学研究』41, pp.54-59。
- 渡邊淳也 (2007b) : 「間一髪の半過去をめぐって」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 52, pp.151-175。
- 渡邊淳也 (2008) : 「分岐的時間の表象をもちいた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 54, pp.15-44。
- 渡邊淳也 (à paraître en 2009) : 「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』43。
- Weinrich, H. (1964) : *Tempus*, Kohlhammer.
- Wilmet, M. (1976) : *Etudes de morpho-syntaxe verbale*, Klincksieck.
- Wilmet, M. (1997) : *Grammaire critique du français*, Hachette.